
生きるために

『G』

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生きるために

【Nコード】
N1448C

【作者名】
『G』

【あらすじ】
ルミス帝国の人々は食料を求めて戦地に赴く。

序章

世界は群雄割拠していた。5つの帝国が争いを繰り広げていた…。

レト大陸北部に雪に埋もれた帝国があった。その帝国の名は『ルミス』。後の200年も続く争いのすべての始まりの国…。

戦いの始まりはルミス領土内の資源不足であった。

年中雪に覆われているルミスでは特に食料不足が深刻な問題になりつつある。

その原因は人口の爆発的増加だった。

ここ20年で26億あまりの人口が40億を突破したのだ。

なぜ、ここまで増加したのか。それは民主制が浸透を始めたからだ…。

現在ルミスは帝国として存在しているが実際は民主国になりつつある。そして現在…。人口の爆発的増加により食料が圧倒的に不足を始めた。ルミス領土内は雪に覆われているためこれ以上の開拓は不可能であった。これによりルミスの人々は”生きのびるため”の戦いを大陸全土を巻き込んで始めるのだった。

第1章：圧倒的軍事力

ルミス帝都 第26訓練場

『……よう……!』

『隊長!……!』

『ん?そんなに急いでどうした?』

『つい先ほど陛下が宣戦布告をなさいました!……!』

『本当か!……?』

『はい!……!』

『そうか……。ついに始まるか……。多くの血が流れるが生きるためだ。仕方がない……。』

『隊長。招集がかかっています。行きましょう。』

『ああ。そつだな。』

ルミス帝都 参謀会議室

『……では、5日後。先発隊200万を南のリト王国へ。その2日後、第二次先発隊500万を。さらに2日後に全軍を送ります。』

『うむ。リト王国相手なら第二次先発隊で十分すぎる相手だ。…が。リト王国の周辺国が黙っていないだろうからな。』

『ええ。リト王国国境は天然の要塞になっていますからね。リト王国を押さえてしまえば後々の戦いも有利に進めれるからな。』

『はい。…では皇帝陛下。よろしいですね?』

『うむ。全軍に出撃用意を急がせよ。』

『『はっ！！』』

5日後

『…』
『…』
『…』
『…』
『…』

『陛下。先発隊に激励のお言葉を。』

『うむ。今行く。』

『ルミス帝国の勇敢な戦士たちよ！！！！君たちはこれから多くの血を流し流されるだろう。だが！！我らが生き延びるにはこの方法しかないのだ。君たちにルミス帝国の未来がかかっていることを忘れないでほしい！！！！！！』

そして。

ついに長い戦いが始まった。

第1章：“兵器”投入

リト王国

『国王！！！！』

『なんだ？』

『先程、密偵からの伝令がありました！！！内容は…ルミス帝国がおよそ200万の大軍勢で攻めてきます！！！！』

『なっ…200万！！？？200万だと！？』

『はい…。我が軍は総勢40万。戦いになりません…。装備の質でも劣っています…。さらには”兵器”の存在も確認されています…。』

『……世界屈指の軍事帝国がついに…動いたか…。周辺国に援軍を

要請しろ…。我が国が落ちるということはここを拠点に大陸北部での戦いが有利になる。周辺国も黙ってはいないだろう。』

3日後

リト王国国境にはリト王国40万、伝令を聞いたタイラー王国80万、マルト王国150万、ザス王国90万の総勢360万が集結していた。この時。帝国からは第二次先発隊500万が出撃に向けていた…。

2日後。

ルミス帝国から第二次先発隊500万が出撃すると同日に先発隊200万がリト王国及び周辺国軍との戦闘を開始した。

『ルミス帝国軍が来ました!!!数はおよそ200万!!!』

『よし!!!数はこっちが上だ!!!仕掛けるぞ!!!』

『はっ!!!』

『弓隊用意!!!そのあと騎馬隊突撃用意!!!数はこっちが上だ!!!落ちていていけ!!!』

『』
『』
『はっ!!!』
『』
『』

帝国先発隊

『將軍!!!敵の弓と騎馬隊により一気に崩されました!!!』

『ぬう…。予想以上に敵が多いな…。今崩されてしまったら第二次先発隊が来るまでもたん。…。よし。要塞戦、攻城戦まで取っておくつもりだったが”兵器”を投入だ。が…レベル1で構わん。対人戦に”アレ”を使うのは…少しむごいからな…。』

帝国軍兵器部隊”レベル1”

『…それにしてももう出番が来るとは思わなかったな。』

『ウン。それにしても。おれらが拾われて6年。やっと帝国に恩返しができる。』

『ああ。そして…ザムスのやつらに復讐出来るのもな。』

『よし…!!行くぞ…!!』

『『『おっ…!!』』』

戦場 帝国軍

『くそっ!!数が多い。奴ら1人に対して常に5人つきやがる…。』

『全軍退却!!!!!!』

『もう!?!早い…。早すぎる…。……まさか。”兵器”部隊投入か
??.??.』

『違います…。おそらく…これが”兵器”の力だと…。』

『……………。状況は??』

『…帝国軍に近づくことができません…。弓も届かない距離です。さらに敵の攻撃が確認できません。さらに…攻撃力も尋常ではありません。』

『どづいつことだ??』

『敵の攻撃を受けたものは…みな死んでます…。しかも即死に限りなく近いです…。』

『ぬづ…。被害状況は??』

『追撃してた全軍のうち…60万がもはや…。』

『60万……………。信じられん…。全軍にギド要塞まで引くように命令だ。正面から戦っては被害が酷くなる。』

『はっ！！』

戦場

『全軍引け——！！ギド要塞まで引くんだ——！！！！！！』

『ギド要塞か。天然の要塞にして難攻不落の要塞。確かに”兵器”の力を考えればそこに行くしかないな。』

ルミス帝国軍

『どつやら敵はギド要塞まで引くようです。』

『そうか。一時崩されかけたが予定通りだ。よし、進撃を開始だ。追撃はしない。確実に進めて行け。』

『はっ』

ギド要塞

『ここが…決戦ですね』

『うむ。なんとしても止めなくては。だがここなら大丈夫だ。ここは太古の昔、人と魔が戦うときに備えて作られた要塞だ。人の力では絶対にこの城壁を砕くのは無理だと言われている』

『そうなんですか』

『うむ。だから』

ズドン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

『な、なんだ!?!何の音だ!?!』

『敵の攻撃です！！！！！！！！ですが城壁はビクともしません！！！！！！』

『だろうな。よし！！援軍が来るまでここで持ちこたえるぞ！！！！！！！！』

『援軍が来るのですか！？』

『ああ。中央大陸に位置するダクス帝国が援軍として5000万を向けてくれたそうだ。』

『5000万！！！！！！！！！！』

『ダクス帝国としてもルミス帝国の軍事力を無視は出来ないからな。』

帝国軍

『ダメです。レベル1では城壁が破れません。』

『さすがは対魔専用の城壁。簡単には碎けないか。よし、レベル3だ。ダメならレベル4だ。』

¥”兵器”部隊レベル2

『ちっ。なんで俺たちには出番が回ってこねえんだ!?!』

『仕方ないだろう。レベル2以上は役割が決まってるからな。俺たちは対超多人数戦と…対魔戦のための部隊だからな。』

『まあ…な。だが世界で確認されている魔は全部で6匹なんだろう？
6匹のためにこれだけの”兵器”とあの訓練が必要だったのか？』

『それは魔と戦ってみたいとなんとも言えないな…。だが忘れるな。
太古の昔には…たった2匹に国が1つ消えているからな。』

『あ、ああ。覚えておくよ。』

『”兵器”部隊レベル3

準備はどつだ？』

『あと5分もすればいけるぜ。それにしても…リィ王国じとまじと
イツを使うとはな…。』

帝国軍

『よし……全軍突撃……第二次先発隊が来る前に片をつけるぞ
……敵は混乱している……いけえええ……!』

第1章：ギザ要塞崩壊（後書き）

兵器部隊一覧

- レベル1 〓 銃”（対多人数、対騎馬隊）
- レベル2 〓 ？？（対魔、対超多人数）
- レベル3 〓 大砲”（城壁破壊）
- レベル4 〓 ？？（？）
- レベルX 〓 ？？

第1章：“過去の遺産”（前書き）

更新が遅れてすみません…。

ギザ要塞内部

『し、司令！！！！帝国軍はもはや第5防衛隊を撃破しました！！！！ここにくるのも時間の問題です！！！！！！』

『帝国軍か……。強いな。このギザ要塞がおとされたらもうわが王国は終わりだ。まだ勝負は決まっではない。混乱を收拾すればまだ勝機はある。』

帝国軍

『ん？なんだ？敵が引いていくぞ。』
『撤退ですかね？』

『いや…そうではないな。どこかに集結してるな。』

『数で押してくるつもりですね。』

『そうだな。だが”兵器”の前には数など関係ないがな。よし、兵器部隊に要塞内に散開するように伝える』

『はっ』

連合軍

『帝国軍は兵器を要塞内に散開させてます。』

『ふむ。とはいっても数で攻めてもなにも意味がない。どうにか白兵戦に持ち込まなければな。』

『それならば“煙幕”というのはどうでしょうか？古くさいですが効果はあるかと。』

『なるほど。それはいいな。では煙幕の用意だ。』

『はっ』

帝国軍兵器部隊

『ん？煙りか…。煙りに乗じて襲うきだな。よし！！！！全体隊列を組め！！！！前方に向けて一斉射げ…！！？』

『ぐわあー！！！！！敵は…弓矢で攻撃か…。てつきり白兵戦にする…。』

『くつ。引けつ引けええええ。』

帝国軍

『なるほどな。敵も中々やりおる。数の利をこんな形で使ってきたか。』

『どうしますか？このままでは兵器を撃つ前に敵の弓にやられてしまいます。かといって近づぐことも出来ない…。』

『こつちは数において圧倒的不利だからな。ここは援軍待ちでもいいのかもな。城壁を砕くというノルマはクリアしたわけだし。』

『うむ。それに兵士の損失は避けたいところだな。よし、要塞から脱出。一旦立て直して援軍を待つぞ。』

リト軍

『撤退か。ま、当然といえば当然か。よし、このすきに城壁の修理だ。』

他国軍

『修理出来るのか！？あれほど砕けたのに…。』

リト軍

『よし。魔法隊前へ。詠唱を開始。』

「……」

他国軍

「……すごいな。これが……対魔専用の城壁といわれる理由か。」

リト軍

「城壁に硬化魔法だ。さっきの帝国軍の攻撃ではまた砕けてしまう。レベルはMAXだ。」

帝国軍

「あれが……過去の遺産か……。やつかいな城壁だ。しかも硬化魔法を城壁にかけてやがる。今度は……レベル4の出番かな？」

第1章：援軍

帝国軍

『あとどれくらいで援軍が来る？』

『あと丸1日です。』

『そうか。まあ敵は討つてでることはないから兵士達につかの間の休息を伝えてくれ。』

『はっ』

『あさつてに…援軍と総攻撃だ。』

ザムス帝国軍

『見えてきた。あれがギザ要塞だ。よし、全軍に命令だ！……騎馬隊は要塞の前にいるルミス帝国軍に突撃だ！……遠慮はいらぬぞ！……いけえええ！……』

連合軍

『あれは…まさか。援軍だ……！……援軍が来たぞ……！……』

『よし……！……これはいけるぞ……！……全軍討つてでるぞ……！……』

『お……！……』

ルミス帝国軍

『あれは…ザムス帝国！？なぜこんなところに？というより騎馬隊がこっちに向かって来てる！！！マズイ！！！全軍戦闘用意！！！兵器1、2部隊用意だ！！！数がハンパじゃない！！！！4000…いや5000万はいるぞ！！！！！！』

『ちつくしよおー！！！！』

兵器部隊レベル1

『ザムスだと！？みんな

！！！！ザムスの奴らが来たぞー！！

！！！！復讐だー！！！！！！』

『『『『おおおお！！！！！！！！！！』』』』

兵器部隊レベル2

『ふう。ついに俺たちにも出番が回ってきたか。』

『敵の数はハンパじゃないな。』

『ま、こついつのを想定したのが俺たちだがな。』

『よし、全員散開！！！！ノルマ1000だ。』

『はいよ〜』

半日後ザムス帝国軍

『ふう。残ったルミス帝国軍は撤退したか。それにしても…“兵器”か…。ありや…ホントに人か？？』

『確かに…。それと“銃の民”の行方がわからなかったが…ルミス帝国にいたとはな。』

『あのときは手こずったが数は少なくてどうにかなったが…あの技術がルミス帝国にいつてしまったか。』

『本格的な戦闘になるまえに知れてよかった。技術局の連中に対銃戦の防具、武器を用意させられるな。』

『うむ。それにしても…もう1つの兵器ありや…“戦いの民”だけ。あの動き。凄まじいな。武器はルミス帝国の用意したものだ…すさまじかったな。』

『まあ…太古に魔と素手で戦った連中の末裔だからな…。ポテンシ

ヤルは人と比べてはいけないだろう。』

『そうだな。んで…こっちの損失は？』

『大体600万といったところだ。ルミス帝国軍の1発1発が強すぎる。ほとんど即死だ。』 『ふう。さすが世界一の軍事帝国か。武器の質もだが一般兵士の質も違うな。』

『ああ。だが奴らの損失はでかいな。』

ルミス帝国軍

『くっ。』

我が軍の被害はどれくらいだ？』 『生存を確認出来た数は…10万です…。さらに兵器にも被害が出ておりレベル1、2は全線で戦っていたため全滅。レベル3は大砲は残ってます。レベル4は温存してあります。』

『そうか。被害がでかいな…。仕方ない。戦線を離脱して後続の部隊に合流だ。』

第1章：援軍（後書き）

これからまたガンバっていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1448c/>

生きるために

2010年10月26日06時07分発行